

特集：公開講座「異文化理解セミナー」

留学生センター 畝田谷 桂 子

1 はじめに

鹿児島大学は、社会人に対し広く学習の機会を提供するとともに、地域における生涯学習の振興に資するため、公開講座を開設している。留学生センターは、この目的にのっとり、地域社会への貢献の一端としてセンター開設から現在までの4年間の蓄積を地域社会に還元するべく、平成16年2月14、21、28日の3日、計12時間にわたり、初の試みである公開講座「異文化理解セミナー」を企画、開催した。本稿ではこの講座の概要をまとめて報告する。(講座で配布したテキスト、資料、講義内容等の詳細は別冊「異文化理解セミナー」報告書(仮称)を参照されたい。)

2 講義日程、題目、講師

2-1 講義日程、題目、講師は以下の表のとおりである。

日 程	題 目	講 師
2月14日(土) 1:00~ 5:00p.m.	*異文化理解入門 *「異文化」の再構築 *イギリス人の鹿児島異文化体験	大嶋真紀(留学生センター長) Sato Van Aacken (ニューイングランド大学日本学科長) Stephen Cother (法文学部外国人講師)
2月21日(土) 1:00~ 5:00p.m.	*共同研究を通しての異文化理解 *パネルディスカッション —日本人の異文化体験談から見えてくるもの— *グループセッション —異文化コミュニケーションスキル ・アサーティブコミュニケーション—	土田充義(前留学生センター長) 畝田谷桂子(留学生センター助教授)、 上野美代子、小口友規子、園田智子、 マルヴィー菜穂子、四元睦美 (留学生センター日本語非常勤講師) 和田礼子(留学生センター助教授)
2月28日(土) 1:00~ 5:00p.m.	*異文化理解の多角的な視点 ~留学生センターの役割~ *多文化主義と日本語教育 ~強さをめざす教育から 弱さのコミュニティへ~	小林基起(留学生センター教授) 春原憲一郎 (財海外技術者研修協会AOTS日本語教育センター長)

場所：総合教育研究棟1階講義室

3 受講者数、プロフィール

3-1 受講者数

受講料納付者は総数20名、そのうち開催期間3日全てに出席した受講者が14名、1日欠席が4名、

2日欠席が1名、全て欠席が1名であった。受講料は大学規定によるもので、7,200円と高額であったが、まずまずの人数が集まったと思われる。

3-2 受講者のプロフィール

セミナーの内容を受講者の経験、知識及びニーズに合わせて充実させるため、受講申し込みの時点で受講申込者にアンケートを依頼した。その結果、主催者が当初予想していた受講者とは異なる結果が得られ、事前調査が企画をする上で大変有益であった。当初は「外国人と接した経験はないが、接してみたい」と希望している年輩の方が多く集まると予想していたが、実際の受講者は県内の日本語教育従事者及びその養成講座の在籍者が70%であり、その他は外国人と接する職業や事業の従事者、小・中学校の教員といった、教育経験、外国人との接触経験ともにプロといえる受講者集団となった。日頃の自らの活動を別の視点で見直し、まとめたいという受講動機であったように思われる。以下が事前調査アンケートのまとめである。(回答者20名)

- 1 性別：男性3名、女性17名
- 2 年齢：20代5名、30代6名、40代3名、50代3名、60代～3名
- 3 職業：学生1名（以前は教師、現在日本語教員養成副専攻科在学）、公務員1名、教師12名、主婦1名、会社員1名、その他4名
- 4 受講の動機：(複数回答可)

仕事で外国の方と接する機会がある	3名
国際交流に関心がある	10名
ホームステイの受け入れをしてみたい	1名
心理学に関心がある	3名
日本語教育に従事しているまたは関心がある	14名
留学を考えている	0名
その他（日本語教育関係の仕事を希望している）	1名
- 5 これまでに外国の方と接した経験について：

たくさん経験した	8名
少し経験した	4名
外国で生活したことがある	6名（トルコ、イギリス）
全く経験がない	0名
- 6 この講座に期待すること：(複数回答可)

理論的な内容	9名
実践的な内容	16名
外国人との交流	3名
異文化理解のためのトレーニング	14名

7 開催を何によって知ったか：

新聞 2 名、ポスター 9 名（県民交流プラザ 1 名、鹿児島大学 3 名、市町村役場 1 名、その他 4 名）、知人から 1 名、その他 8 名（鹿児島日本語教育研究会、鹿児島大学 HP、大学の先生の紹介、教育情報研究所、リビング鹿児島、志学館大学）

4 講義概要

講義担当者が各自まとめた講義概要等を以下に掲載する。

4-1 異文化理解入門

大嶋 眞紀（留学生センター教授）

< 講義の概要 >

異文化を理解するとはどういうことかについて理論的な導入を試みた。

はじめに、異文化理解の目的、「文化」の定義、目に見えない文化とはどういう領域をさすか、などといったことについて、文化人類学やコミュニケーション理論のアプローチを紹介した。

次に、異文化を理解する際にどのようなことが障壁となるかというテーマを扱った。心理学的なアプローチとして、われわれがものを見る、他人を見る、他文化を捉える際にどのような知覚的問題があるかについてふれ、さらには相手とのコミュニケーションにまつわる諸問題や、問題解決方法の多様なあり方などを扱った。

内容が抽象的になったため、ここで参加者の問題意識を、自己紹介を兼ねて話してもらい、異文化理解とは何かについて改めて問いかけた。価値観のちがいとしばしば口にするが、価値観とは何か、価値観を共有できない場合、どのような態度が望ましいかなどについて話し合った。

最後にもう一度、異文化を理解するとは要するにどういうことかという点について、一人の人間が背後に背負うものの大きさ、深さについて触れ、締めくくった。

< 感想及び今後に向けて >

公開講座ははじめての試みで、しかも「異文化理解」というかなり広い領域を対象としたため、どのように焦点をしぼるか考えた。特に、受講者の半数近くが当初思い描いていたような、「異文化理解」の初心者ではなかったため、テキストと講義の準備にあれこれ迷ったが、当初の計画通り、「異文化理解」の初歩的な理論の紹介に限った。

結果としては、公開講座全体の枠組みを示す上でも、またこのような講座ははじめてという方たちにもどうか対応できたと思う。

ただ、日程の後半に集めたアンケートの「質問・意見」を見ると、鹿児島大学留学生センターのさまざまな試みやポリシーに関する質問なども多々あり、しかもそれらの質問に期間中だけでは十分答えきれなかった面もあり、もっと具体的なセンターの日常の紹介でもよかったのかなと思う。ただ、それは公開講座以外の場で今後検討していくべきであろうと今は考える。

<講義の概要>

オーストラリア大陸に住まいを移して15年、日本社会からのひとりの移住者としてこの豪州の多言語多文化社会体験を重ねてきた。まず、ここでは母語社会での文化を「自文化」、外国語社会での文化を「異文化」と呼ぶ。

人々は各人のアイデンティティとして「自文化」を築いており、このアイデンティティとしての自文化は固定的なものではなく絶えず変化している (Hall 1996)。また 十人十色で人はすべて全く同じ文化を「自文化」として抱いているわけではない。主な要因としては各人の世代／年齢、性別、社会的階級、人種、言語、国籍、宗教、教育背景等々が挙げられる。

異文化と接触するとき「自文化」のある要因が「異文化」のそれと大きく違う場合はしばしば精神的衝突に直面し、その都度その「異文化」社会との間にある境界線の向こうを理解するために様々な異文化コミュニケーションが必要になる。そのためには積極的な働きかけが必要で、時には長い時間がかかり、ある時は「異文化」に対して否定的な態度を抱くようになったり、また、ある時は諦めて「しょうがない」と感じる。

私の主な生活体験は大きく職場、社会、家庭という三場面でプラスやマイナスの衝突が繰り返された。学内での学科再編成時の目に見えない差別闘争、毎日起こる山火事への住民の静かな態度、多文化社会の食文化の多様性等々、具象的、触知可能なものや抽象的、触知不可能なもの (牧野2003) など様々である。

これらの「異文化」体験は、自分の考えや価値観に基づき、新イメージの発見や衝突、あるいはステレオタイプの見直しや再認識が行われる。衝突があれば柔軟な態度でその違いを自分で確かめ、時間をかけ、固定概念を超えて流動的に対処することにより、「自文化」と「異文化」を折衷した別の異文化を再構築していく。これこそカルチャーショックを超えて「異文化」社会を積極的に生きるコツと言えよう。

<講義を終えての印象>

「異文化理解」セミナーが鹿児島で開催されたのは、やっぱり鉄砲伝来以来のソト文化に敏感な土地柄ではないかと思う。新学期開始前の企画の先進性と参加者の皆さんの意気込みに拍手を送りたい。

An Englishman in Kagoshima

Having been asked to give a talk in the Intercultural Understanding Seminar, I thought that it would be interesting for the audience to hear about my experiences when I first arrived in Japan in 1993. At that time I had never been to Japan before, had had very little contact with Japanese people and thus had very little idea of what life in Japan would be like.

As a participant on the ALT (JET) programme, we were given quite a lot of information on life in Japan, and also some of the dos and don'ts of the culture. It was this that formed the basis of my talk. When you enter a foreign culture for the first time, you can be either prepared or not. In the case of ALTs the Ministry of Education et al. tried to ensure that we would be prepared for life here through lectures and workshops on the fundamentals of Japanese culture. At these orientations many of the participants were overwhelmed with what seemed like a myriad of rules for social etiquette that had to be learned so as not to offend our hosts. However after having lived here for a short time, it became apparent that many of these rules did not apply to normal everyday life. In fact they served more to cause misunderstandings and confusion initially, but also enabled me to relax in the culture, once I had realized that the rules were in fact not so daunting after all.

The question then arises of why these rules were taught to us if they do not apply. It has often been my opinion that the Japanese in general have an image of what they would like their society/culture to be like - but in actual fact this is not the case. Examples would be rules for visiting someone's house, the persistence of the four seasons myth etc. that are often taught in cultural courses for foreigners but which do not actually apply once you are in the culture.

My talk concluded with some of the more amusing anecdotes of the first few months working on Tanegashima, based on small cultural misunderstandings and of course the language barrier.

Audience reaction to my talk was fortunately very good. However this was to be expected since it is easy for Japanese people to relate to their own culture, and indeed interesting to hear how someone from another culture misinterprets everyday phenomena.

I felt the seminar on the whole was well-rounded. Professor Oshima's introduction to intercultural understanding provided a sound basis for Professor Van Aacken and myself to give our personal accounts of life in another culture.

4 - 4 共同研究を通しての異文化理解

土田 充義 (鹿児島大学名誉教授、前留学生センター長)

< 講義の概要 >

共同研究に大切なことは人間と人間の絆が重要で、お互いの気持が一致する同志がいて始めて成立するものだと体験から述べた。

次に大切なことは共同研究に両大学の院生を巻き込んで、修士論文・博士論文を書かせ、受動的立場を能動的立場に仕向けることである。このことで裾野が広がり、成果は一段と拡大するであろう。

共同研究は組織であると同時に人間と人間との学問的交流でもある。個人的な研究方法も含めて

互いに尊重し合い、個人的交流を深める。その方法として教官と院生の派遣・受入れにとりかかった。

これらの共同研究を通して、異文化理解をどう考えるか。その第一歩として相手国を、私達の場合は中国であるが、好きになることである。国全体に好意を持ち、積極的に関わりあうことである。次に、新しい成果を生み出すためには私達の身近にある建造物をよく知ることである。このことによって、比較検討ができる。その結果、相違点が見えてくる。最後の第三は相手の考え方、建造物の違いを自分の尺度で測らず、よく観察し、相違を認めることである。

最後に、共同研究による成果として、日本の民家と中国湖南省の漢族及び少数民族（トン族・土家族）民家の相違を説明した。説明を通じて日本と中国の民家の違いを理解してもらえればそれで十分であった。

<講義を終えての印象>

受講生は熱心に講義を聞き、時間の関係で打ち切る程に活発な質問を受けた。受講生の多くは外国滞在の経験を持ち、何らかの形で、外国に関心を持っている人々で、また留学生との接触も示していた。それで、異文化理解に関心を示し、公開講座に参加することになったのであろう。外国に目を向けながらも、足元を照らし、自分の立っている所をしっかりと見つめることの大切さを感じた。

異文化理解は常にベターを追及し、ベストは具体的でかつ限られた範囲のみで可能との認識を新たにした。異文化理解は人間と人間との関わり、尊重し合う関わり、喜び合う関わりで深めて行くことも知りえた。

<今後の課題>

人間と人間との信頼の上に文化交流があるし、国際理解も深まる。その人間と人間を繋ぐ絆は深い思いやりであろう。それは動作や言葉や表情で表わし得る。その中でも言葉を使うコミュニケーションで共同研究は成果が上がる。それで語学力も大切だが、動作や表情も相互理解に役割を果たす。と同時に、目に見えない心の奥底にも目を注ぎたい。

4-5 パネルディスカッション—日本人の異文化体験談から見えてくるもの—

畝田谷桂子（留学生センター助教授）、上野美代子、小口友規子、園田智子、マルヴィー菜穂子、四元睦美（留学生センター日本語非常勤講師）

<概要>

このセッションでは、受講者と同じ日本文化に属するパネリストが、様々な異文化で体験した話を聞くことで、自分が体験していない異文化について知ると同時に、それらの一見まとまりのない些細で個人的な様々な逸話として表される「異文化体験」の「底流を流れる真実」とは何かを考えることを目的とした。

考察の前提として、まず「異文化接触のタイプ」には、自分がその社会の文化に属しているかどうかによって、タイプA（他文化（外国）の中に、それと異なる自文化を持つ個人が入り込むケー

ス)とタイプB(自文化の中において、自文化と異なる文化を持つ個人と遭遇するケース)があると分類した。さらに「異文化理解セミナー」には、タイプA用に「海外渡航前に、行き先の国の文化一つに適応することを前提としたトレーニング」と、タイプB用に「自文化の中にながら、自文化とは異なる文化を持つ個人との遭遇を想定したトレーニング」があるとし、本セミナーは後者であること、及びそこではあらゆる文化の人に遭遇することが想定されること、遭遇する個人が持つ文化によって、日本文化に対する見方や感じ方が一様ではないことを例を挙げて説明した。しかし物理的、時間的に限られた人間1人がすべての文化について自文化との違いを体験することは不可能であることを指摘し、そこに「異文化体験」の「底流を流れる真実」を探る意義があることを説明した。

5人のパネリストは、ボリビア、アメリカ、カナダ、タイ、イギリス、マカオ滞在経験者で、文化の「見える部分」からは衣服の着方、色の好み、フォーマルさ等、台所用品や文房具等の道具類、「見えない部分」からは友人、親子、教師と学生間等の人間関係、個々人が体験した文化的衝突体験、さらに帰国後の逆カルチャーショックについて語ってもらった。具体的な内容は、別冊「異文化理解セミナー報告書」を参照されたい。

パネリストの様々な逸話を聞いた後、まとめとして、それらの「異文化体験」の「底流を流れる真実」とは、「体験の深浅に関わらず、外国生活体験によって我彼を比較できること」すなわち、「自分の無意識を意識化する視点=日本を外から見ること→複眼の獲得、見えなかった物が見えるようになること」であるとした。これは日本において、外国人と接触しても起こりうることである。さらに、「文化的適応の過程」とは、「異文化社会へ組み込まれていく過程(外国生活)で、知識としてのステレオタイプ・旅行者的観察から、個人的な文化的衝突を通して、具体的・私的体験として異文化を体感することである」とした。そしてこれは、「異文化に対する自分の見方の構築」であり、「柔軟な態度で構築をくり返せることが大切である」とした。最後に、「文化的適応」とは、「自文化と異文化を折衷して第3の異文化を構築することであり、これは自文化の再構築でもあり、そのため逆カルチャーショックも生む」とした。

日本にいる外国人を受け入れる時に大切なことは、現在彼等がこれらを体験中であるという理解である。日本文化に適応する過程にある彼等は、決して自文化を忘れて、あるいは否定して日本人に同化するのではなく、自分の属する文化を通して日本文化を見ているのであり、日本文化に適応しながら、自文化と日本文化の間の第3の文化を構築中であるという認識である。

このことを理解した上で、1)彼等の行動や考え方の背景を考える余裕を持つこと、2)そのような背景についてよく聞こうとする態度を持つこと、3)日本人の行動や考え方の背景について無意識を意識化してよく説明すること、が重要である。そのためには「開かれた心と態度、コミュニケーション活動への積極的な参加行動力」が必要である。そこで、「積極的な発信型のコミュニケーション」が大切になってくる。「積極的な発信型のコミュニケーションとは何か?」を次のグループセッションのテーマにつなげてパネルを終えた。

補足として、資料集から園田(タイ)の「外国で生活する上でのストレス解消法」(日本滞在外

国人にアドバイスとしても通じる)も大切だと紹介した。

4-6 異文化コミュニケーション・スキル「アサーティブ・コミュニケーション」

和田 礼子 (留学生センター助教授)

<概要>

このセッションでは『異文化コミュニケーションワークブック』(三修社、八代京子他著、2001年)の中でとりあげられている「アサーティブ・コミュニケーション」を紹介し、グループでいくつかのタスクに取り組んでみた。「アサーティブ・コミュニケーション」とは「相手を尊重しながら自分の考えや気持ち、権利について適切に主張するコミュニケーションの方法」である。

日本人同士では以心伝心などといったりするように、言語化しなくても相手の気持ちや言いたいことを察するという事は「美德」だという感覚がある。逆に全ての要求や気持ちを言語化してしまうと、自己主張が強すぎると嫌われてしまったりすることもある。

日本語教育の中でも、誘いを断るとき、「あした、映画に行きませんか」「行きません」と答えるより「あした、映画に行きませんか」「あ、明日はちょっと・・・」という会話のほうが日本語らしいといった指導をする。これは日本語という言語そのものを教えているというよりは日本人のコミュニケーションのパターンを教えているといえよう。「明日はちょっと・・・」と聞いて「ちょっと、何ですか」とか「行くか行かないかはっきり言ってください」などと質問攻めにされると、日本人は「何か詮索されているようだ」とか「行くことを強要されている」といった不快な気持ちになることもある。日本人のコミュニケーションパターンを日本語学習者に最初から教えるのは、トラブルの芽を少しでも摘んでおくといった意味合いを持つ。

一方、どうしても相手に意思を伝えなければならない時は自分の意見を主張する必要があるわけだが、我々はこのように慣れておらず、不適切なコミュニケーションスタイルをとってしまうこともある。コミュニケーションスタイルには「攻撃的で強い自己主張」をとる形、逆に「相手に合わせるばかりの受身的態度」などがあるが、これでは問題の解決にはつながらない。そこでこのセッションでは「相手を尊重しながら自分の考えや気持ち、権利について適切に主張するコミュニケーションの方法」を紹介した。

アサーティブ・コミュニケーションの具体的な方法を以下にあげる。

- 1 アクティブリスニングをする (相手の意見を正確に理解して聞く)
 - ・相手の意見を確認する
 - ・自分の理解が正しいかどうか相手に尋ねる
- 2 オープンエンドの質問をする
 - ・「はい」「いいえ」でしか答えられない質問ではなく、相手が自由に自分の意見を述べるような質問形式
- 3 相手を責めずにこちらの状況を説明する「わたし文」を使う
- 4 相手に対する共感も示しながら、自分の意見を伝える (共感アサーション)

5 相手と自分の立場や意見のどこが違っているのか明らかにする

(相違を明らかにするアサーション)

これらの方法について説明をした後、4名1組のグループに分かれ次のようなタスクを行った。

《タスク例》

次のような状況の時、受身的コミュニケーション、攻撃的コミュニケーション、アサーティブコミュニケーションではどのようなやり取りになるかグループで考え、最後に発表してください。

- ◆アメリカ人のルームメイト、メラニーは職を失い、私と分担している家賃を払ってくれません。初めて払ってくれなかったときに、支払計画について2人で話し合い、合意しているのに、月末に私から「今月の家賃は？」と言い出さない限り払ってくれない状況が3ヶ月も続いています。毎日顔を合わせる日常生活は何事もないかのようにフレンドリーに過ごしています。私を馬鹿にして払っていないようには見えませんが、疑心暗鬼になります。お金のことを何度も言うのはいやなのですが、2人分の家賃は高いので、遅れても仕方がないが絶対払ってもらいたいと思っています。

このグループでの話し合いは25分にも及び、予定の時間を超えてしまったが、各グループとも自由で積極的な討論が行われていた。また各グループには異なるタスクを与えたが、最後の発表の際「それは受身的だ」「アサーティブではない」など自由に講評しあうことができた。このセッションの目的はアサーティブ・コミュニケーションを「学ぶ」ことではなく課題を「考える」ことで異文化コミュニケーションの一つの方法を体験することにあつたが、この目的は十分に達成することができたと思う。

引用文献：『異文化コミュニケーションワークブック』2001年 三修社 八代京子、荒木晶子、樋口容視子、本志都、コミサロフ喜美著

4-6 異文化理解の多角的な視点～留学生センターの役割～

小林 基起 (留学生センター教授)

<講義の概要>

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1 留学生 (外国人) を知る | 2 海外日本語教師のネットワークについて |
| 3 鹿児島大学留学生センターの取り組み | 4 多国籍合宿 |

1から4までの講義内容を準備したが、まず鹿児島大学留学生の実態を知っていただくため、担当講義の一週間前に拙論「留学生指導をめぐって」「留学生・日本人学生・地域社会三者間異文化交流の試み」(『留学生センター報告書』2001・2002年度所収)を配布し、感想・質問をメール等で当日までにお送りいただいた。10名の方からお返事をいただき、そのいずれもが高い問題意識を持たれていることに感心させられた。また興味の持ち方や理解度にも差があり、質問内容も多岐にわたっていた。それらすべてにお答えすることは時間的にも不可能であったので、部分的な紹介を広く行

う結果となり、資料のみの提示に終わったものもあった。しかし、終了後のアンケートでは、交流活動にスタッフとして積極的に参加したいとお答えを5名の方からいただいた。

1 留学生（外国人）を知る

地域ボランティア日本語教師としての筆者の体験を通じた外国人との交流の楽しさと難しさを紹介し、日本社会にとけ込もうと努力している留学生（外国人）に、どう日本人は答えていくべきかという姿勢について論じた。中国は日本語学習者数が世界第2位で日本滞在者数第1位だが、中国内での外国語学習者数の順位では日本語学習者数は第27位と人気がない。これは歴史上の不幸な一時期と現在の日本に原因があるが、帰国中国人の宣伝にも影響されている。今でも中国で日本語を学ぶことにはそれだけでリスクを負う現実があり、そのリスクを犯してまで日本語を学んでいる中国人を大切にせねばなるまい。そのような中国の現実を多くの日本人は知らないが、韓国にも同様の傾向がある。反日感情の強い韓国での日本語学習者数は70万人を超え世界一だが、この数は中等教育で日本語を採用しているからである。韓国の高校生が日本の高校を訪ねた時「私は高校で日本語を勉強していますが、韓国語を勉強している日本人はどれくらいいますか」と質問を受けて何と答えたら良いのだろうか。日韓交流が言葉だけで、国際交流は英語からなどと隣国を軽視していると思われないか心配である。さらに東南アジア・中央アジア・中東・アフリカ等、知らないことは多い。知らないことをそのままに過ごさず、無自覚の負担と圧迫とを留学生（外国人）に与えている可能性に気付き配慮する姿勢が日本語教師やボランティアには先ず必要である。教師は常に権力側に位置し、留学生（外国人）はつねに教師（指導教官や日本語教師）の顔色、人柄、外国人理解度、思想を窺い、そつなく反応している。彼らの言葉にならない声を聞き分けることが重要である。2、3、4は省略。

4-7 多文化主義と日本語教育～強さをめざす教育から弱さのコミュニティへ～

春原 憲一郎（(財)海外技術者研修協会AOTS日本語教育センター長）

<講義の概要>

いま、「剣はペンより強し」「剣はペンも利用する」という剥き出しの力の論理が勢いをもっているなかで、他言語を学ぶこと、言語を獲得することの意味について考えた。日本語教育は外国語教育のひとつであり、外国語教育は言語学習の一部であり、言語学習は言語習得、さらに言語獲得の過程であり、言語獲得は、<声>を持つことの一つの道である。<声>を持つとは、その人が生きるところの地域社会や活動領域のなかで、発言権を持ち、社会参画でき、社会形成にかかわることのできることである。それは、必ずしも言語である必要はなく、言語以外の、たとえば、技術—大工の、井戸掘りの、織物の、自動車整備の技術や、芸能—舞踏や音曲、楽器演奏、カラオケでもいいし、もしかしたら、愛嬌がある、聞き上手であるということでもよいかもしれない。他言語教育をするとき、畢竟、<声>をもつことをめざすことが大切である。

一方で、世界に5,000とも8,000とも言われる言語の中で政治的に力を持ち、市場価値をもっている言語はごくごく僅かである。それを私は覇権言語とよんでいる。日本語も覇権言語の一つとして、北海道、沖縄等を植民地化し、住民の言語を奪う形で日本語を<普及>させてきた。1895年の台湾上陸直後からはじまった日本語教育は、教師6人が殺されるという「芝山巖事件」を生んだ。「芝山巖事件」は決死の覚悟で同化教育に臨むとして美化され、彫像まで作られた。その影で、蜂起した台湾の人たちが20人あまりだったのに対して、日本軍に報復で殺された台湾の人たちは1,500人と言われ、約10,000万戸の家屋が焼かれた。

現在の日本語教育が19世紀、20世紀前半のアジア太平洋戦争のころと変わっていないということを通し資料をしてみた。言語教育を考えると、今までのパラダイムを変える意識をもたない限り、結局、国益や市場原理の中で下請け事業としての覇権言語教育に終わる。自分が刷り込まれた知識や文化—価値観や行動様式—を、ヘレン・ケラーが若き鶴見俊輔に語ったように、一度「unlearn／学びほぐす」こと大切である。そのためにまず他者の存在を丸ごと受け入れること、それを谷川俊太郎の「みみをすます」という詩の群読を通じて感じてもらった。さらに日本語教育に関して言えば、現在、初等教育からはじまろうとしている英語教育、そして日本人に対する国語教育の三者を土俵にのせて議論のできる座標軸が必要である。それらのいずれもがナショナリズムとグローバリゼーションの要請で行われている。今回の講座では、いろいろな資料を使いつつ、上記のような<ながめ>を語り、そのあとで、オータナティブな言語教育を模索するためにどのようなアクティビティが可能なのか、ステレオタイプや規範意識をゆさぶるいくつかの活動を紹介した。

5 受講者による評価

セミナー終了後に受講者によるアンケートを行った。予定していた受講者によるディスカッションの時間が取れなかった事以外は、概ねよい評価を得ることができ、全員が今後のセミナー継続開催を要望していた。以下にアンケートのまとめを記す。(回答者数16人、内、全出席者14名、最終日1日欠席2名)

1) セミナーは全体として分かりやすかったか (以下数字は回答者の人数)

とてもわかりやすかった 13 まあわかりやすかった 3

【コメント】

- 1 異文化理解についてなんとなく見えてきた気がします。
- 2 興味がある分野ただけに、先生方にいただいたキーワードに感銘を受けました。
- 3 留学生のかかえる問題が具体的にわかり、お友だちになることにプラスしたい。
- 4 初めての参加で、専門用語をあまり知らないのが不安だったが、資料や説明が詳しく、かつ分かりやすくて良かった。

2) セミナーの全体の構成はよかったか。

とてもよかった 10 まあよかった 5 どちらともいえない 1

【コメント】

- 1 異文化理解のためのゲームなどをすると面白いと思いました。
- 2 講義あり、パネルディスカッションあり、アクティビティーありと楽しかったです。フリートークもできたらよかったです。
- 3 もっとフリートーク、ディスカッションがやりたかったです。
- 4 1、2回目と3回目のテーマに少し連続性のギャップを感じた。
- 5 初日の理論的導入と2日目、3日目の実践面のバランスがあって参考になりました。
- 6 様々な視点から異文化理解をとらえることができ、良かった。とくに2日目の全員参加型のセミナーが面白かった。

3) セミナーは、受講前に期待していた内容だったか。

まさに受講前に期待していた内容だった 1 受講前に期待していた内容とほぼ同じだった 9
受講前に期待していた内容とは少し異なった 5 記入なし 1

【コメント】

- 1 期待していた以上のものでした。
- 2 もう少し専門的なお話があると思っていました。
- 3 心理学、異文化へのアプローチ法、他言語、多文化社会の理解が貴重でした。
- 4 期待、と申しますか、全く何がおこなわれるか分からなかったので本当にいろいろと勉強していくきっかけをいただきました。ありがとうございました。
- 5 期待以上の収穫があった。「アサーティブ」コミュニケーションについてももう少し勉強してみようと思う。

4) セミナーは受講する価値があったか。

大変あった 15 まああった 1

5) セミナーの内容に満足か。

大変満足している 12 まあ満足している 4

【コメント】

- 1 ①人的ネットワークができたこと。②日常生活で心掛けていけそうな知恵をいただけたこと。
- 2 留学生の生の話も聞いてみたかったです。

6) セミナーで特に面白かったテーマは何か。(複数回答可)

異文化理解入門 (2/14、大嶋) 8

「異文化」の再構築（2/14、バンアーキン哲子）	4
イギリス人の鹿児島異文化体験（2/14、スティーブン・コーダ）	8
共同研究を通しての異文化理解（2/21、土田）	5
パネルディスカッション—日本人の異文化体験談から見えてくるもの— （2/21、畝田谷、上野、小口、園田、マルヴィー、四元）	9
グループセッション（2/21、和田）	12
—異文化コミュニケーションスキル・アサーティブコミュニケーション—	
多文化主義と日本語教育～強さをめざす教育から弱さのコミュニティへ～（2/28、春原）	10
異文化理解の多角的な視点～留学生センターの役割～（2/28、小林）	7

【コメント】

- 1 具体的に教室で生かせそうな活動内容を紹介してもらってよかったです。
- 2 全て勉強になりました。特に春原先生の授業が大変面白かったです。
- 3 それぞれ専門的な分野のプレゼンですごくためになった。なかなか聞けない事だったので本当に勉強になりました。ありがとうございます！！
- 4 自分の仕事観、国際交流団体のメンバーとしての役割を強く反省する機会となりました。それぞれ自分が置かれている立場で、何ができるかを見直して、明日からまた生きていきたいです。
- 5 体験本や体験談にはない、ほんのささいなこと、日本人には日常のことが、どんなに特殊に見えるかを知って、びっくりした。
- 6 はじめて触れる内容でしたのでとにかくゆっくり整理していろいろと考えてみたいと思います。
- 7 どれも興味深かったが、アサーティブコミュニケーションは、色々な場面で役立つようなので、もう少し勉強してみようと思った。
- 8 パネルディスカッションはもう少し専門的なものに。スティーブン・コーダ先生のお話の再考？ 期待するものとかなりズレた。もっと深く聴きたかった。小林先生への質問等（メールやFAX）に対しての確実な答えの資料がほしかった。

7) 来年以降もこのようなセミナーを開催したほうがよいか。

開催した方がよい 16

8) セミナーの個別テーマについての感想、今後の要望など。

【コメント】

- 1 次回は是非ディスカッションの時間をとってほしいです。
- 2 参加者の異文化理解に対する考え方を意見交換出来る時間が取れなかった事は残念でした。

- 3 貿易ゲームやバファバファ (?) などもやってみたらいいと思います。
- 4 この期間中正に異文化理解……理解できないことがあり、異文化理解入門の時に大嶋先生がおっしゃった理解できない時はあきらめる……うけいれるというような事で乗り越えたのですが、やっぱりなかなか簡単な事ではないとつくづく感じました。これから先、このセミナーを受けたことによってたくさんの場面で助けられると思います。ありがとうございました。
- 5 イベントのお誘いの掲示、留学生との情報交換。
- 6 中国に対する異文化理解、特に日本語教育における中国人学習者の学習適応法について。
- 7 同様のセミナーがあったらまた参加したいと思います。
- 8 セミナーを通しての感想や意見の用紙は初日に配布してほしかったです。さすがに法文学部のセミナーはちがう！と思いました。伝える？、伝わる内容、伝え方も素晴らしいです。次回をとてたのしみにしています。ありがとうございました。(乱文乱筆失礼いたします。)

(筆者注：本セミナーは「法文学部」ではなく、「留学生センター」主催のセミナーであります。)

6 まとめと今後の課題

今回の企画は、主催者である留学生センターにとって初めての経験だったので、いろいろな意味で勉強になった。全体及び個別テーマそのものについて教官個人が考えを練り、まとめるきっかけとなったこと、広報手段や会場設営等の運営上の諸問題を解決することなどである。幸い受講者からよい評価が得られて、それらは報われた思いがする。セミナー開催に当たり、御協力いただいた関係各位に改めて感謝の意を表したい。今後のセミナー開催については、受講者のアンケートを分析し、留学生センター教官同士で議論を深め、企画に活かしたい。